ミサがわかるセミナー　2025～2026 シリーズ

年間テーマ　：　旅する神の民とミサ　～　喜びと希望をともに！

第４回　2025年11月16日（日）

感謝の典礼①　エウカリスティアとは？

担当　石井祥裕

今回は「感謝の典礼」について概観します。とくに注目するのは「感謝」と訳される「エウカリスティア」という言葉です。聖書に示される旧約～新約の神の民の祈りと礼拝に根ざすこの言葉は、感謝のほかに賛美や奉献の意味をも含み、さらには「聖体」を指す語となります。なによりもイエス自身が感謝の祈りをささげつつ定めた主の晩餐から「感謝の祭儀」（ミサ）が成り立ってくる経緯が重要ですので、その振り返りを踏まえて、「供えものの準備」から「奉献文」への式次第の流れを（「奉納」や献金も含めて）考えていきます。神の民の心を最も深く表す「エウカリスティア」について、わたしたちの理解を深めていきましょう。（予告文より）

はじめに）感謝の典礼とは「エウカリスティアの典礼」

《ミサの式次第の構成》	（ラテン語）
＊開祭	Ritus intiales
＊ことばの典礼	Liturgia verbi
＊感謝の典礼	**Liturgia eucharistica**
供えものの準備	**（Praeparatio donorum）**
奉献文（エウカリスティアの祈り）	**Prex eucharistica**
交わりの儀（コムニオ）	Ritus communionis
＊閉祭	Ritus conclusionis

※名詞＝eucharistia　　形容詞＝eucharistica

感謝の典礼＝Liturgia eucharistica　＝「エウカリスティアの（ための）」典礼

奉献文　Prex eucharistica　エウカリスティアの（ための）祈り

参考＊東京教区生涯養成委員会オープン講座　2025-2026「私たちを生かすミサ」――

エウカリスチア（聖体）が主題　　（※「エウカリスチア」と表記されることもあり）

同じことばが「感謝」　「奉献」　「聖体」など、多様な日本語で表されている事実！

１．　聖書と歴史から意味をたどる

（0）エウカリスティアとはもともとはギリシア語　「感謝」

与えられた恩恵に対して積極的に応えること＝感謝

→ラテン語では→　グラーツィア　grātia「恩恵/感謝」（grātia agō　感謝する）

ただし、聖書の「エウカリスティア」はヘブライ語の翻訳から教会用語に育っていった

（1）旧約の神の民と「感謝」

a）感謝の献げ物（ヘブライ語「トーダー」）

＝「神から受けた恩恵に対して感謝の務めを果たすために献げられるもの」

レビ記7章12、13、15節では「和解の献げ物」の一種が「感謝の献げ物」

b）詩編における「感謝」の広がり・深まり

＊「感謝のささげもの」の心

詩56:13「神よ、あなたに誓ったとおり、感謝の献げ物をささげます」

詩116:17-18「あなたに感謝のいけにえをささげよう、主の御名を呼び、

主に満願の献げ物をささげよう」

＊感謝と賛美は一体、それは歌

詩26:7「（主よ、わたしは、感謝の歌声を響かせ、驚くべき御業をことごとく語り伝えます」

詩71：22「わたしもまた、わたしの神よ、琴に合わせてあなたのまことに感謝をささげます。
イスラエルの聖なる方よ、わたしは竪琴に合わせてほめ歌をうたいます」

詩100：1－5「1全地よ、主に向かって喜びの叫びをあげよ。2喜び祝い、主に仕え、
喜び歌って御前に進み出よ。3知れ、主こそ神であると。主はわたしたちを造られた。
わたしたちは主のもの、その民、主に養われる羊の群れ。
4感謝の歌をうたって主の門に進み、賛美の歌をうたって主の庭に入れ。感謝をささげ、
御名をたたえよ。5主は恵み深く、慈しみはとこしえに、主の真実は代々に及ぶ」
（典礼聖歌174参照） etc.

＊「告白」としての感謝

詩50:14「告白を神へのいけにえとしてささげ、いと高き神に満願の献げ物をせよ」
23「告白をいけにえとしてささげる人は、わたしを栄光に輝かすであろう。
道を正す人に、わたしは神の救いを示そう」

（2）イエスの食事における「賛美と感謝」

a)大勢の人を満たす食事でのイエスの行い ＝ ユダヤ教における会食儀礼の動作にのっとっている行為

賛美の祈り：「イエスは五つのパンと二匹の魚を取り、天を仰いで賛美の祈りを唱え、
パンを裂いて、弟子たちに渡しては配らせ、二匹の魚も皆に分配された」
（マルコ6:41 同様にマルコ8:6; マタイ14:19; ルカ9:16）

感謝の祈り ：「イエスは……7つのパンと魚を取り、感謝の祈りを唱えてこれを裂き、
弟子たちにお渡しになった」（マタイ15:36; 同様にヨハネ 6:11）

b） 最後の晩餐での行為

一コリント書11：23－26

「主イエスは、引き渡される夜、パンを取り、感謝の祈りをささげてそれを裂き、
『これは、あなたがたのためのわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい』と言われました。
また、食事の後で、杯も同じようにして、『この杯は、わたしの血によって立てられる新しい契約である。飲む度に、
わたしの記念としてこのように行いなさい』と言われました。だから、あなたがたは、このパンを食べこの杯を飲
むごとに、主が来られるときまで、主の死を告げ知らせるのです。」

マルコ14:22,23「イエスは、パンを取り、賛美の祈りを唱えて、それを裂き、弟子たちに与えて言われた」
「また、杯を取り、感謝の祈りを唱えて、彼らにお渡しになった」（マタイ26:27-28も同）

ルカ22:19,20「イエスは、パンを取り、感謝の祈りを唱えて、それを裂き、使徒たちに与えて言われた」
「食事を終えてから、杯も同じようにして言われた」

c)復活したイエスの、エマオでの弟子たちとの食事での行為

ルカ24：30-31「一緒に食事の席に着いたとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いて、
お渡しになった。すると二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった」

（3）使徒たちの勧告 →信仰生活の根底をなす感謝

「霊に満たされ、詩編と賛歌と霊的な歌によって語り合い、主に向かって心からほめ歌いなさい。
そして、いつも、あらゆることについて、わたしたちの主イエス・キリストの名により、父である神に
感謝しなさい」（エフェソ 5:19-20; コロサイ 3:16-17参照）

「第一に勧めます。願いと祈りと執り成しと感謝とをすべての人々のためにささげなさい。」
（一テモテ2・1）

※すべての人のための祈りについての勧告→ミサの「共同祈願」へ

（4）初期の教父が伝える「エウカリスティア」の典礼と祈り

キリスト教典礼史の概説書で必ず紹介され、引用される、重要な古典：　　（下線は講師付加）

a）『十二使徒の教え』（2世紀前半まで）

9 「エウカリスティアについては、次のように感謝の祈りを捧げなさい。
初めに杯について。
『私たちの父よ。あなたの僕[子]ダビドの聖なる葡萄の木についてあなたに感謝します。
それはあなたがあなたの僕[子]イエスを通して私たちに知らせたものです。
栄光はあなたに永遠にありますように。』
裂かれたパンについて。
『私たちの父よ。あなたがあなたの僕[子]イエスを通して私たちに知らせて下さった生命と知識について、
あなたに感謝します。栄光はあなたに永遠にありますように。
山々の上に散らされていたこれらのパンが集められて一つにされたように、
あなたの教会が地の果てからあなたの御国へと集められますように。
栄光と力はイエス・キリストによって永遠にあなたのものだからです。』」

10 「満ち足りた後に、次のように感謝の祈りを捧げなさい。
『聖なる父よ。あなたが私たちの心の内に住まわせて下さったあなたの聖なる名について、
またあなたがあなたの僕[子]イエスを通して私たちに知らせて下さった知識と信仰と不死について
あなたに感謝します。
すべてを支配される主よ。あなたはあなたの御名のゆえに万物を創造されました。
あなたは人間に食物を与えて楽しませて下さいました。それは、人間があなたに感謝して祈るためです。
しかし、私たちにはあなたの僕[子]を通して霊的な食物と飲み物そして永遠の生命を賜りました。あなたは力ある方ですので、何よりもまず、あなたに感謝の祈りを捧げます。栄光はあなたに永遠にありますように。

主よ、すべての悪から救い、あなたの愛において完全にするために、あなたの教会を顧みて下さい。そして教会を聖別して、四方から、あなたが準備なさった御国へと導き集めて下さい。力と栄光は永遠にあなたのものだからです。
恵みが来ますように。この世が過ぎ去りますように。ダビドの神にホザナ。もし聖なる者であるならば来なさい。聖なる者でなければ悔い改めるように。マラナタ。アーメン。』」

14 「主の日ごとに、あなたがたは集まり、あなたがたの生贄が純粋になるように、前もってあなたがたの罪を告白したうえで、パンを裂き、感謝の祈りを捧げなさい。友人と争っている者は皆、仲直りするまではあなたがたに加えてはならない。あなたがたの生贄が汚れないためである」

［中世思想原典集成『初期ギリシア教父』所収訳より］

示されること：

エウカリスティア　＝キリストを記念する「主の晩餐」の典礼　＝　感謝の祭儀、　感謝の典礼
賛美（栄唱）と感謝は一体の祈り　　全体としてエウカリスティアの祈り（感謝の祈り）
エウカリスティア　が　新約の神の民（キリスト者）の「いけにえ」であること
創造による食べ物に対して、キリストによる「霊的な食物と飲み物」であること（＝聖体の考え）

b）ユスティノス『第一弁明』（150-55年頃）

65章（洗礼式後の感謝の典礼）
（入信式が終わり、受洗者を共同体に迎え、一緒の共同祈願と平和の挨拶が済むと）
「兄弟たちの指導者のもとに、パンおよび水と混酒を注ぐ杯を運びます。それを彼は手に取り、子と聖霊との名によって万有の父に頌栄をささげ、父がこれにふさわしい者としてくださったことに対し、長い感謝をするのです。彼が祈りと感謝を終えると、臨席する全会衆はアーメンと言って同意を表します。アーメンとはヘブライ語で、「そのようにあれ」ということを意味します。
さて指導者の感謝と全会衆の同意があった後、私共の間で執事と呼ばれる者たちが、臨席者の一人一人に、感謝したパンとぶどう酒と水にあずからせるのです。また、欠席者のために持ち去ることにもなっています」

66章（エウカリスティアの意味とその制定）
「この食物は私共の間で『エウカリスティア』と呼ばれ、これにあずかることのできるのは、私共の教えを真理と信じ、罪の赦しと新生のための洗礼を受け、キリストが伝えた通りに生活する者に限られます。それ以外は誰もあずかることができません。なぜなら私共はこれらの品を、普通のパンや普通の飲物のように受けているのではないからです。神の言葉によって受肉した救い主イエス・キリストが肉と血とを受けたのは、私共の救いのためであったという、このことに対応して、キリストから伝え受けた祈りの言葉で感謝した食物も、私共の受けた教えによれば、あの受肉したイエスの肉と血であり、私共の血肉はその同化によって養われるのです。すなわち使徒たちはその手になる「福音」と呼ばれる回想録の中で、自分たちは次の命令を受けていると伝えました。－イエスはパンを取り、感謝して言われた。「わたしを記念するため、このように行いなさい、これはわたしのからだである。」同じく杯も取り、感謝して言われた。「これはわたしの血である」。そして、これらの品を使徒たちだけに分け与えられた、と」

［教文館刊『キリスト教教父著作集』訳による］

示されること：
食卓に用意されたもののうえに「祈りと感謝をささげる」こと＝エウカリスティアの祈り（→奉献文）
この祈りがなされた食物＝聖別された「聖体」＝「エウカリスティア」

◎2世紀に 「感謝」（エウカリスティア）はキリスト者の典礼を代表することばとなっている
そして 「エウカリスティア」の多様な意味が展開されて示されている

＊キリストによって命じられたキリストを記念する晩餐型典礼 （「パンを裂く」「主の晩餐」）
＝典礼行為全体としてのエウカリスティア＝「感謝の祭儀」「感謝の典礼」
＊パンとぶどう酒の杯の上に唱えられる神への感謝の祈り
＝エウカリスティアの祈り → 「奉献文」（奉献の祈り）
＊被造物であるパンとぶどう酒に感謝の祈りが唱えられて成ったキリストの体と血
＝エウカリスティア（聖体）

その後の変化：
「食事」イメージに対し「奉献」イメージへの全体様相の変化
「食卓」→「祭壇」
「食卓への食べ物・飲み物の準備」→「祭壇への供えものの準備」
「感謝の祈り」が 「供えもの、ささげもの、いけにえ」「ささげます、受け入れてください」という用語を主軸とする全体として「奉献の祈り」（奉献文）となる

しかし、感謝～奉献のすべては 元来の「トーダー」→「エウカリスティア」に含まれている
「聖体」を「キリストによる救いの恵みに対する感謝」という大きな文脈の中で理解することが重要

＊＊＊

２．現行ミサの式次第における感謝の典礼の姿
（供えものの準備から感謝の賛歌まで）

供えものの準備（Praeparatio donorum）

※「奉納」（offertoriumの訳）は「奉献」と区別され、供えものの準備を表す語
奉納の歌（cantus ad offertorium）

奉納行列（processio ad offertorium）

パンとぶどう酒を供える祈り（小声　※奉納の歌のない場合に、はっきりと唱え、会衆もはっきりと応唱する）

＊創造の恵みに感謝し、創造主である神を賛美する
詩編～古代ユダヤ教にあった創造主への賛美の祈り（ベラカー）の伝統が受け継がれ、
＊2世紀の教父資料に見られる神からいただいたものから神にささげるという関係が表明される

司祭）神よ、あなたは万物の造り主。　（直訳「万物の神、主よ、あなたはほめたたえられています」）
Benedictus es, Domine, Deus universi,
ここに供えるパンはあなたからいただいたもの、
大地の恵み、労働の実り
わたしたちのいのちの糧となるものです。
会衆）神よ、あなたは万物の造り主。

司祭）神よ、あなたは万物の造り主。
ここに供えるぶどう酒はあなたからいただいたもの、
大地の恵み、労働の実り
わたしたちの**救いの杯**となるものです。
会衆）神よ、あなたは万物の造り主。

奉納祈願（Super oblata ＝供えられたもの上にする祈願）

招きのことばと会衆の祈り

司祭　皆さん、ともにささげるこのいけにえを、
全能の父である神が受け入れてくださるよう祈りましょう。
会衆　神の栄光と賛美のため、またわたしたちと全教会のために、
あなたの手を通しておささげするいけにえを、神が受け入れてくださいますように。

＊参照『典礼憲章』48「教会は、キリスト信者が、……主の御からだの食卓で養われ、神に感謝し、ただ司祭の手を通してだけでなく、司祭とともに汚れのないいけにえを捧げて自分自身をささげることを学び、キリストを仲介者として、日々神との一致の完成に向かい、ついには神がすべてにおいてすべてとなるよう細心の注意を払っている。」

（狭義の）奉納祈願（その日固有）

例：　年間第33主日の奉納祈願

万物を治められる神よ、あなたの栄光をたたえて供えものをささげます。
わたしたちがまことの礼拝をささげ、永遠のしあわせにあずかることができますように。
わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。」

※感謝の典礼の中心である奉献文において行われ、祈られることへの導入の祈願

奉献文（エウカリスティアの祈り）　（広義、式次第の区分として）

導入の対話句

司祭　主は皆さんとともに。
会衆　またあなたとともに。
司祭　心をこめて、
会衆　神を仰ぎ、
司祭　賛美と感謝をささげましょう。
会衆　それはとうとい大切な務め（です）。

＊古代教会（東西）ともにほぼ共通の伝統的な対話句
＊原文は「感謝をささげましょう」だけだが、
日本では「賛美と感謝をささげましょう」としている
今日、新たに出会った旧約・詩編の祈り、イエスの祈り、
使徒の祈りの伝統に結ばれる意義
＊会衆が「それはとうとい大切な務め」と唱える＝
神の民に恵みとして与えられている使命の自覚を自ら告げる
意義の重要さ

叙唱（Praefatio 「司祭は、聖なる民全体の名によって、神である父の栄光をたたえ、
救いのわざ全体のため、
または、日、祝祭、季節に従って、それぞれの特別な理由のために感謝をささげる」
（「ローマ・ミサ典礼書の総則79a」

例：「王であるキリスト」の叙唱

聖なる父、全能永遠の神、いつどこでも主・キリストによって賛美と感謝をささげることは
まことにとうといたいせつな務め（です）。　（※原文は「感謝」、「賛美と感謝」は日本語版）

あなたはひとり子である主イエス・キリストに喜びの油を注ぎ、永遠の祭司、宇宙の王となさいました。
キリストは十字架の祭壇で、ご自分を汚れのない和解のいけにえとしてささげ、人類あがないの神秘を
成しとげられ、宇宙万物を支配し、その王国を限りない栄光に輝くあなたにおささげになりました。
真理と生命の国、聖性と恩恵の国、正義と愛と平和の国。

神の威光をあがめ、権能を敬うすべての天使とともに、わたしたちもあなたの栄光を終わりなくほめ歌
います。

感謝の賛歌（サンクトゥス）
→叙唱への応唱
天上の礼拝と地上の礼拝の一致　天使の集いと連なる「わたしたち」

聖なる、聖なる、聖なる神、
すべてを治める神なる主。
主の栄光は天地に満つ。

天には神にホザンナ。
主の名によって来られるかたに賛美。
天には神にホザンナ。

イザヤ6:3
「聖なる、聖なる、聖なる万軍の主、主の栄光は、地をすべて覆う。」

詩編118:25-26
「どうか主よ、わたしたちに救いを。（下線部　ホーシ・アンナー）
どうか主よ、わたしたちに栄えを。　［この両句は嘆願かつ賛美］
祝福あれ、主の御名によって来る人に。」
マタイ21:9
「ダビデの子にホサナ。主の名によって来られる方に、
祝福があるように。いと高きところにホサナ。」
（マルコ11:9-10も同様）　［ホサナはすでに賛美句］

示されること：
＊ホザンナ/ホサナ＝定型賛美句
（「主よ、いつくしみを」が嘆願形式でありつつ賛美句、賛歌であることと同様）

＊ヘブライ語の賛美の代表語の一つ「ベラカー」にある祝福と賛美の両面を受けることばが使われている
（[ギリシア語]エウロゲーメノス、eulogēmenos,[ラテン語]ベネディクトゥスbenedictus
受動完了分詞（ここでは「賛美あれ、祝福あれ」の意味）

結び）感謝の典礼の始まりの部分を深く味わいつつ参加することの大切さ

エウカリスティアとは
賛美と一体の感謝の祈り
そして感謝をあらわす行為としてささげもの・奉献を含む

エウカリスティアとは、また聖体
そのうちにキリストの自己奉献を通して与えられた神の恩恵と神の民の感謝の自己奉献が一つに融合